

後志【喜茂別町】

いまぜき まいこ
今関 舞子さん 喜茂別旧双葉小学校史料館 雪月花廊 代表

1975年生まれ、札幌市出身。静修女子短大(現・国際短大)幼児教育学科卒業後、札幌市内で幼稚園教諭として勤務。近所でインテリアショップ等を経営していた夫(愛称:ととさん)と2003年に結婚、2004年に喜茂別町に移住。夫、子ども3人と「雪月花廊」に住む。



今関さんと夫のととさん



「いってらっしゃい」「おかえりなさい」で家族のような時間を

きっかけ

結婚する少し前に、ととさんが喜茂別町で廃校になった旧双葉小学校を借りて、アンティーク品を展示する史料館「雪月花廊」を作り始めました。誰もが通ったことのある小学校、ここに詰まっている思い出を廃校によって壊したくないという思い。そこに賛同して、「私も一緒にやっていきたい、こんなことを応援できるのは私しかいない!」と思って結婚しました。「人生は思い出が宝物」というスローガンのもと、生後6か月の長男と一緒に家族3人で喜茂別町に移住しました。先のことは深く考えず、家族の新しい生活を夢見ていましたね(笑)。

苦勞

元々小学校だった所に住み始めましたが、生活できる場所とお客様を迎える環境を整えるのが大変でした。古い建物なので、あちこち老朽化していましたが、直してもらおうお金もないし…。設計や配管など建設作業に関しては素人ですが、手探りで作業していました。でも、不思議なことに困っていても必ずプロの方が助けてくださるのです!お風呂の配管は、以前左官だったという方が整えてくださり、雨漏りしていた屋根は、ペンキ屋さんが材料をくださって直し方まで教えていただいて、皆さんの力で雪月花廊を作っていただいています。

満足度

雪月花廊には、アンティーク品の展示のほか、カフェやビリヤード台、露天風呂、キャンプ場等があり、いつもお客様でにぎわっています。お客様をお見送りする時は「いってらっしゃい」、お迎える時は「おかえりなさい」という言葉を大切にしています。ここでの時間を一緒に過ごす、不思議と家族のような関係ができあがってしまうのです。人と人のご縁がどんどん繋がって、大家族のように楽しい時間を過ごせることがとても嬉しいです。かつては子どもたちの声が消えかけたこの校舎に、たくさんの人が集い笑い声が響くと、本当に良かったなあと幸せな気持ちになります。

これから

疲れた時や何かにつまずいた時、ここに帰ってくるとなぜか元気になってまたがんばれる。そんなふうに言ってくださるたくさんの方々が「ただいま〜!」と帰ってきてくれる。それが雪月花廊を続けていく大きな力になっています。古い校舎を維持していくのはなかなか大変ではありますが、一人でも多くの「ただいま」が聞けるように、少しでも長く続けていけたらと思っています。体育館や校庭など広い空間があるので、使い方によって限りなく可能性が広がります。おもしろいアイデアを持った方々にもっと活用してもらいたいですね。

北の★女性たちへの
メッセージ

先のことばかり考えて心配すると何もできなくなるので、やりたいと思った時に動くこと。一人では難しくても、ぜひパートナーを見つけてやってみましょう。一生懸命やっていると、必ず助けてくれる人が現れます。失敗を恐れず、笑顔で、色々なことにチャレンジしてみてください。

後志【黒松内町】

にしむら
西村せいこ
聖子さん

株式会社アンジュ・ド・フロマージュ 代表取締役

1954年生まれ、札幌市出身。38歳の時にお菓子教室で学び、2001年に札幌市内でサロン・ド・テ*「パティスリー・アンジュ」をオープン。紹介で出会った製造技術者と一緒に理想のチーズを求め、黒松内町に拠点を移し2011年に「アンジュ・ド・フロマージュ」を設立。



黒松内の大自然の中で、チーズを囲んだ癒しの時間を

きっかけ

夫と娘を亡くした経験から、札幌市のサロン・ド・テは、人が多く集う場所にしたいくて、食事会もやっていました。チーズは、夫も娘も私も大好きだったので、自分で作ってみたいとずっと思っていて、大学や乳業会社でチーズ作りをしていた製造技術者2人から作り方を習って、食事会でお出しするようになりました。そのうち若い技術者が「もっと本格的にチーズを作りたい」と言いだして、熱意がものすごく強くて(笑)。私ともう1人の技術者も「やってみようか」ということになり、黒松内町の地域再生拠点交流観光実験研究施設の指定管理者に応募して採用されたので、札幌市のお店を閉店して黒松内町に拠点を移しました。今は、実家のある札幌市との二地域居住をしています。

苦勞

黒松内町での最初のチーズ作りが大変でした。2011年7月のグランドオープンに向けて、半年前に移住した若い技術者が試作を重ねていたのですが、使う水や牛乳など、色々な環境が変化することによって、できるチーズの味も違いました。「これ!」という味になるまで試行錯誤を重ねて、なんとかオープンに間に合わせることができました。黒松内町の地元の方々は、最初は「よそから来て何かやっている」と遠くから見ている感じでしたが、今では「アンジュの応援団」と言ってくれる方もいて、少しずつ受け入れられているのかなと感じています。

満足度

黒松内町はとっても良いところで、自然が本当に素晴らしいんです。ここを選んで本当に良かったと思っています。おかげさまでチーズは好評で、近隣市町村に滞在している外国人からの受けも良く、品薄状態が続いています。今は、チーズ作りは製造技術者に任せています。私の担当は、チーズ工房に併設したレストランホールでのお料理とお菓子製造、イベント開催です。札幌市のお店で交流のあった様々な方をお招きして、コンサートや講演会等を開催しています。町外の方に来ていただいて、黒松内町の自然に触れて皆さんが癒されているのを見ると、嬉しい気持ちになります。

これから

このお店を、ヨーロッパのマナー・ハウスのような、都会の方々が大自然の中で数日間ゆっくり過ごして癒される場所にしたいので、今後は宿泊施設も作りたと思っています。あと、本州のお客様から羊肉の要望があったので、牧場で羊を増やしたいですね。私は、ホームスパン(羊毛の糸で織った織物)をやりたいと思っています。フェルト加工もやってみたくて、教室などを開いて町内の方も来てくれたらいいなと思っています。今まで、本当に良い人たちに巡り合ってきました。これからも、人との出会いを大切にしていきたいですね。

北の★女性たちへの
メッセージ

私は普通の主婦で、札幌市でも黒松内町でも、お店を始めるときは周囲から大反対を受けました。でも、スタートが遅くても大丈夫! 思うような結果がすぐには出ないかもしれないけど、選んだ先に道は必ず続いているから。いつでもスタートしてくださいね。

後志【古平町】

ほんま りかこ
本間 利和子さん 一般社団法人ふるびら和み 代表理事

1967年生まれ、古平町出身。高校卒業後、事務職を経て介護職に転職。「看取りまで寄り添いたい」との思いから2011年に「ふるびら和み」を設立。愛と感謝のなかで最期を迎えられるよう支援する民間資格「看取り士」を2014年に取得し、道内でも先駆的に実践。



そよ風のように寄り添い、命と向き合う「看取り」をサポート

きっかけ

古平町内の事業所でケアマネジャーをしていた時、「最期まで尊厳ある人生を送るには」ということを考え、「どこでどう死にたいか選べること」と自分のやりたいことに出会えました。ちょうどその頃、島根県で看取りをやっている柴田久美子さんを知り、余市町での講演会に参加しました。そこで柴田さんが本にサインをしてくださったのですが、「凜と生きる」と書いてあったのです。その言葉に背中を押されて、独立を決心し社長に話したところ、「本間さんを応援するから、この事業所を継いで頑張ってください」と言ってくださり、資材や利用者さんを引き継ぐ形で2011年に「ふるびら和み」を立ち上げました。

苦労

家で看取るには医師の往診が必要ですが、引き受けてくれる医師がなかなか見つかりませんでした。あちこち探して、ようやく近隣市町村で見つけることができました。あとは、看取りを希望している方でも、「家族に迷惑をかけるから」と諦めたり、ご家族も「引き受けられない」と、なかなか看取りに踏み切ることができない方々に対して、意識を変えていただくにはどうしたらよいか悩みます。看取りは、送る側にとってもとても大切なもので、満足して送ってあげられたという体験が、生きる力になります。ご本人の希望を叶えられるよう、ご家族には看取る大切さを伝えていきたいです。

満足度

家で看取することを決めたご家族をサポートさせていただくと、皆さん看取りに向けて意識が高まり一つになっていく中で、ご本人とご家族を支えていける喜びを感じます。そして、命を引き受ける瞬間に私も立ち会わせていただくことがあり、看取りの瞬間に関わらせていただくと、「ご本人の想いを叶えられて良かった」と達成感と幸福感が得られます。利用者さんとの関わりでは、看取る直前で言葉がなくても、手を握るだけで心が伝わる瞬間があります。命と向き合い、命の尊さに関わる仕事をさせていただいていることに心から感謝しています。

これから

昔は家で亡くなるのが自然でしたが、今は死が怖いものになっています。看取り士として、看取る心構えや準備を支援し、不安を和らげてそよ風のように寄り添い、家での看取りを希望される方の願いを叶えていきたいです。また、在宅介護や看取りを支える基盤を、地域でしっかりと作っていきたいです。死は怖くないと思えると、安心して今を生きていけます。また、ご家族でなくても、地域の方に見守られて亡くなるのが幸せという方もいます。地域の方とのつながりを作りながら、地域で看取る、優しいまちづくりをしていきたいです。

北の★女性たちへの
メッセージ

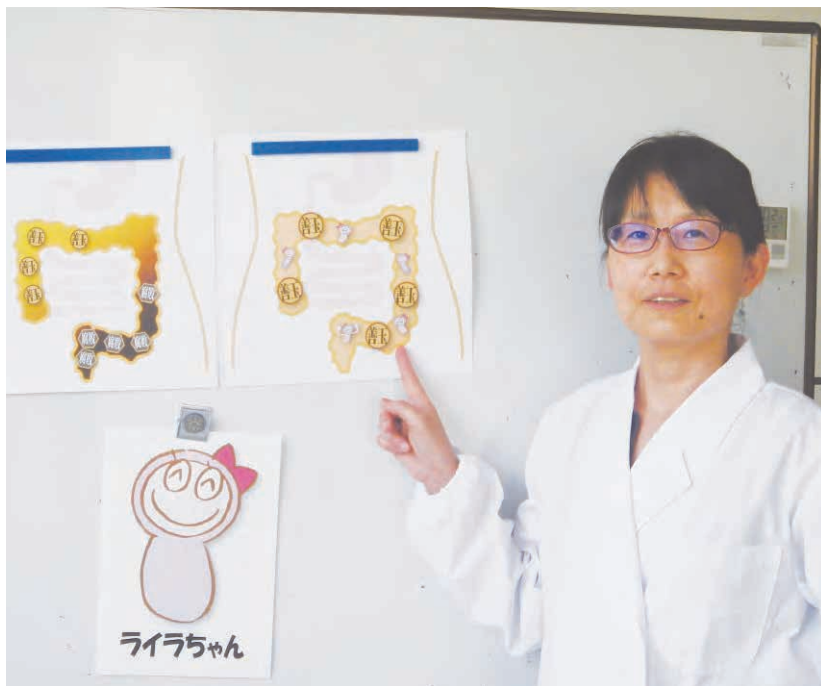
やってみてダメでも笑えますが、「やっておけば良かった」という後悔はしたくないですね。せっかくの人生、「チャレンジしてこそ命輝く」と思います。好きなことをすると魂が喜びます。一歩踏み出せば必ず応援してもらえます。迷ったときは「愛」を選んで♡

後志【小樽市】

みなみ だ
南田きみ こ
公子さん

農学博士、アテリオ・バイオ株式会社 取締役・主任研究員

1962年生まれ、札幌市出身。1985年3月、北海道大学農学部農芸化学科応用菌学教室卒業。食品会社勤務、講師を経て、38歳で研究の道へ進み43歳で学位取得。アテリオ・バイオ株式会社設立に参画。「ライラック乳酸菌シリーズ」を開発。うち5製品は北海道食品機能性表示制度（ヘルシーDO）に認定され、ドクターリラ子として、ブログ、クックパッド、YouTubeなどで活動中。



「腸内細菌の語り部」を目指して、夢は全国全世界行脚です！

きっかけ

子供のころからおなかが弱く、常に下痢やおならの悩みがありました。大人になってからの検査で乳製品アレルギーとわかり、乳製品をやめたとたんに下痢は治りましたが、今度は便秘になり、困っていました。ちょうどその時にしていたオカラの研究で、ライラックの花からみつけた乳酸菌を自分で培養して食べたところ、今まで飲んだどの薬よりもおなかの調子がよくなり、周囲に配っても好評だったので、一緒にオカラの研究をしていた社長と、乳酸菌を製造・販売する会社を設立しました。

苦勞

ライラックの花からみつけた乳酸菌は有孢子性乳酸菌という種類で、孢子（芽胞）を作らせるのが難しい上に、乳製品アレルギーの自分でも食べられるように植物性（大豆）にこだわったために、乳酸菌の培養の検討に時間がかかりました。検討後は、乳酸菌の培養などの製造を外注しようとしたのですが、強い乳酸菌だったために、日本中の培養会社から断られました。結局は培養タンクを探して、自分達で製造を始めました。販売も外注せずに、ネットショップをつくるなど、何から何まで自分達で一から立ち上げたことです。

満足度

体にすっとなじむ、今までにはない体感性のいい乳酸菌製品を開発して、無我夢中で製造・販売までしてしまいました。自分たちのおなかの調子もよくなり、知人・友人から、「調子よくなったよ！」と言われ、さらにお客様から直接電話やメールなどで具体的に調子がよくなったお話を伺うと、やはり非常に嬉しく、研究だけでは得られない満足感があります。最近、「腸内細菌の語り部」として腸内細菌についての講演活動も始めましたが、みなさんが楽しんで聴いてくださるのも非常に嬉しく、全国全世界行脚の旅に行こうともくろんでいます（笑）。

これから

臨床試験を行い、北海道食品機能性表示制度（ヘルシーDO）の認証も受けましたが、まだまだ選べる乳酸菌シリーズ「ライラック乳酸菌」の認知度は低いので、宣伝も兼ねて、腸内細菌の研究者だから知っていることを、ブログやフェイスブックなどのSNSを利用して発信しています。今では、北海道だけではなく、沖縄やドイツからもメッセージをいただいています。今後も、腸内細菌と共に生きるための食事や研究者だから知っている情報等の発信や、楽しくわかりやすい講演など、お役に立てる活動を行いたいと考えています。

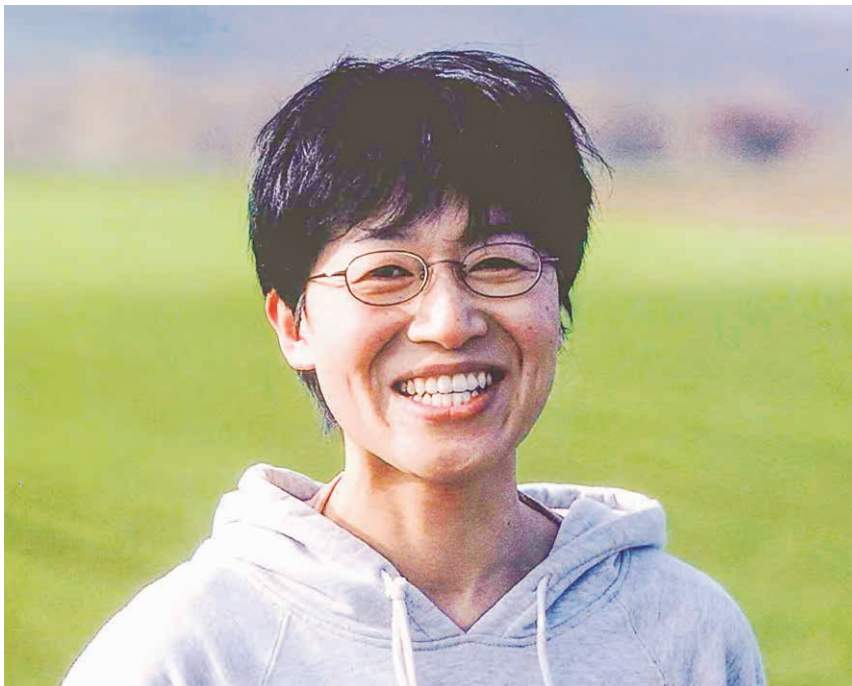
北の★女性たちへの
メッセージ

私の場合、その時に与えられたことを「自分にはできない」と諦めずに、一生懸命していたら、道が拓けました。やりたいと思ったことはやれるようです。まずは、「初めの一步」を踏み出してみませんか？「ミッション ポッシブル」ですよ〜♪

後志【京極町】

よしかわ ゆきこ
吉川 由紀子さん 農業、パン工房よしかわ 店主

1967年生まれ、札幌市出身。短大在学中に製粉会社が主催するパンコンテストで全国大会優秀賞（最年少）を受賞。病院の管理栄養士として就業。1993年、畑作農業を営む夫と結婚し京極町へ。得意のパン作りの腕を生かして2005年「パン工房よしかわ」をオープン。



パンを通じて人とつながり地域のコミュニティをつくる

きっかけ

パンづくり歴は年期が入っていますよ。何しろ、高校生の頃からですから。製粉会社主催のコンテストに、北海道代表として出場。2回目の挑戦で、全国大会優秀賞を受賞しました。料理をすることが大好きだったので、将来の夢は「調理人」。しかし、調理の世界は、まさしく「男社会」。周囲の心配やアドバイスを真摯に受け止め、地元の短大に進学し、栄養士の資格を取り就職、医療機関の栄養士としてキャリアを積み、管理栄養士の資格も取得しました…そしてその間も、実は毎日、職場から帰宅後、パンを焼いていたのですよ。そんな中、京極町で畑作農業を営む夫と知り合い、結婚することになりました。

苦勞

「家庭菜園もやったことがないのに農業ができるのか」と、両親には随分心配をかけ、反対もされました。でも、意外に私の性格には合っているのかもと思っていたみたいです。女性という視点でいうと、やはり家事をし、農業を手伝いながら、その上で自分のやりたいことをやる。そんな大変な中でいろいろな人と交流し、活動することに価値があると思っています。パン教室を続けてこられたのは、「頼まれるならパン教室をやって欲しい。農業は人を頼めばできるから」という夫の言葉でした。自分の楽しみでもあったので、まだ幼い娘3人を連れて町外や管外までパン教室や講演会に出かけていったこともあります。

満足度

今はパン教室が中心で、管内全域から参加者がいます。パン教室では、皆さんとパン作りをすることは勿論ですが、私の手料理を振る舞い、ここで採れる野菜の良さを知ってもらったりもしています。パン教室の参加者にはジャガイモなどの収穫体験もご案内しており、他からこの地域に転入なったり、農作業の経験の無い方もこの収穫体験に参加され、土に触れ、楽しんでいただくことで農業を知ってもらうきっかけにもなっているのかなと思います。また、自分で焼いたパンを地域のみなさんが収穫した野菜などと物々交換したりして、我が家は地域の皆さんの交流の場にもなっているのかなと思います。

これから

私にとって、パンづくりはもはや生活の一部です。特別なことではないのです、年期が入っていますので。私はパンを名刺代わりにこれからもパンと歩いて行くのかな？最近、修学旅行生の体験学習や民泊も受け入れています。農業に関わる女性として、ここで収穫したもののおいしさ、そして農業を都市に住む人や若い世代に伝えていけたらと思っています。個人的なことなのですが、最近フルマラソンに挑戦しており、先日も北海道マラソンを完走！目標は全国各地で開催されるフルマラソンの大会を全て完走することです。健康は、パンづくり・全ての基本ですよ！

北の★女性たちへの
メッセージ

「これをやりたい！」と思う瞬間が自分に訪れたら、慌てず急がず、一旦立ち止まり、まずはとことん考えてから行動してください。「これでいい。」と思わず、自分に多少の負荷をかける、そんな気構えも大切なこと。そして、交流を持つこと。新しい世界を発見します。

胆振【厚真町】

う え み ち
上道か ず え
和恵さん

厚真町放課後子ども教室運営、オフィスあっぷ・ろーど 代表

1985年生まれ、浜頓別町出身。大学卒業後、民間企業での勤務を経て、2011年NPO法人ねおすに入社。厚真町放課後子ども教室の運営を任される。2016年NPO法人解散により同年、『オフィスあっぷ・ろーど』を設立。



子どもたちの、地域の方々の、そして私の、居場所づくりを…

きっかけ

だって、子どもたちだったのです、知り合いがいない厚真町で最初に友達になってくれたのは。直接のきっかけは大学2年生の実習で、NPO法人ねおすにお世話になり、子どもの自然体験等を通じ地域に関わることを仕事としている方々と出会い、「社会教育を切り口に、まちづくりの仕事がしたい。」と考えたこと。さらに卒業研究で故郷のまちづくりに係る調査と取材・執筆をし、地域の中で、目をかけ手をかけて貰った自分の存在を再認識したこと。私が貰った優しさを次世代にも、と思い、放課後子ども教室に携わり、今への大きなターニングポイントとなっています。

苦勞

大学卒業後は地域づくりの仕事を望んでいましたが、まず社会経験を積む必要を感じ、民間企業に就職。その後NPO法人へ転職し、2年目“厚真町放課後子ども教室”の運営を任せられました。NPOの看板の重み、継続を望まれる事業にしたいとの意識、一方、足りない経験値をどう埋めるか・子どもたちから信頼される大人なのか等々、日々、試され続け、必死に応え続けた初年度、継続には必要な時間でもありました。現在、目新しさが薄れ地域の関心も落ち着つつあります。地域の魅力等を自覚しそれを次世代への承継する重み、困難を乗り越え、続けた時にみえる“面白さ”、これらを皆で共有したい!今後の課題です。

満足度

「ただいまー!」子どもの声、「遊びに来た」と卒業した中学生、そして、「毎回、教室の日を楽しみにしているのですよ」と笑顔で語る保護者の方。こうした様々な瞬間が私に、子どもたちの“居場所づくり”ができつつあることを実感させます。また、教室の活動を通じ、保護者や教師、地域の方と関わる機会が増え、地域の産業・自然等と子どもたちをつなぐ活動もできるようになりました。知り合いゼロからスタートしましたが、今では町内200名以上の子どもたちの名前と顔が一致します。そして私自身の居場所ここにあります!子どもたち、保護者、地域の方々に感謝。

これから

成長した子どもたちが地元を離れたとき、厚真町出身を誇りに感じて欲しい。放課後教室でまいた種、故郷で過ごした時間を心の糧とし、自分を支える根となるような体験をたくさんさせてあげたいと思います。また、都市部に比較し地方ではまだ、女性が、社会と関わりを持てる選択の幅は狭い。仕事だけではなく、家庭があり子どもがいても、社会参加ができ、小さくても自己実現ができる場をつくる!それは現在の地域の潜在的なニーズです。そして、私の今後の活動を維持する仕掛けになると考えています。地域のなかに沢山眠っている女性のチカラを発掘し、何か面白いコトができる仕組みをつくっていききたいと思います。

北の★女性たちへの
メッセージ

子どもからお年寄りまで様々な人が生きる社会。年代、性別、出身や価値観、目に見える形だけにこだわらず各自の得意分野を持ち寄れば想いを形にできるはず。仕事はオトコマエに、でも、しなやかさと強さは忘れず、やりたいこと・やらねばならないこと・できることを見つめ、元気な地域を、北海道をつくっていきましょう。

胆振【壮瞥町】

おか
岡ドルゲ・コジマさん 壮瞥町地域おこし協力隊

1981年生まれ、ドイツ南西部出身。ロンドン大学院で日本の文化・社会学の修士を取得し、2008年に伊達市に移住し就職。2013年に札幌市内を経て2015年から現職。北海道の新しいキャッチフレーズ「その先の、道へ。北海道」の英訳版「Hokkaido.Expanding Horizons.」を作成。



壮瞥に新しい風を起こし、もっと魅力的な町に

きっかけ

小さい頃から父に日本の話を聞いており、とても興味があったので大学院で日本の文化を研究しました。前職のクリプトン・フューチャー・メディア株式会社では、初音ミクを海外に売り込むためのマーケティング業務を担当しており、自分の中での目標をほぼ達成できた頃、「何か新しいことをしたい」と思い始めました。今までグローバルな仕事だったので、もっとローカルな仕事したいと考えていた時に、壮瞥町で地域おこし協力隊を募集していたので、早速応募して、採用されました。

苦勞

何か新しい企画を考えた時、役場の方々の理解を得るためのデータ集めや資料作成が大変です。役場には今までのやり方があり、失敗できないという考えがありますが、前例のない新しいことを提案しているので、今までの流れを変えてもらわなければならず、ここが難しいですね。私は、結構自由に言わせてもらっていて、これからもどんどん新しいことを提案していきたいです。あとは、壮瞥町の地域おこし協力隊員は私一人なので、仲間がほしいなと思うことがあります。

満足度

最初の課題だったホームページの改修が終わり、情報発信の手段として最新のものをそろえられたことには満足しています。「まずはオンラインで攻めない！」とっていたので(笑)。また、役場の方々が新しい提案を受け止めようとしてくれていると感じており、新しいことを受け入れる体制が少しずつできていくことが嬉しいです。以前よりも私の話に耳を傾けてくれますし、私が提案したことを自分から調べてくれたり、理解しようとしてくれているのでありがたいですね。

これから

壮瞥町の空き家を改修し、移住希望者の短期ステイや観光客の方に体験を提供する場所を作りたいと考えています。空き家改修自体も、DIY*の体験メニューにしたり、北海道の大自然を楽しむような体験を提供したりして、人を呼び込めたらおもしろいですよね。まだ町と協議中で実現できるかどうかわかりませんが、できればいいなと思っています。壮瞥町は本当に素晴らしいところなので、これからも壮瞥町を盛り上げていきたいと思います。

北の★女性たちへの メッセージ

女性の視点はクリエイティブで、新しいことを生み出し動かすパワーがあります。男性社会の中で戦い疲れてモチベーションが下がることもありますが、自分のアイディアを発信することはとても大事で、可能性はそこから開きます。強く、そして負けないで！



胆振【苫小牧市】

苫小牧市

2007年「苫小牧市男女平等参画推進条例」施行、2008年「苫小牧市男女平等参画推進計画」策定。2013年に北海道初となる「男女平等参画都市」を宣言し、市を挙げて男女平等参画及び女性の活躍を積極的に推進。2017年10月に日本女性会議を開催予定。



「日本女性会議 2017とまこまい」で男女平等参画の推進を

きっかけ

本市では、1968年に開館した「苫小牧市婦人ホーム」（現在の「苫小牧市男女平等参画推進センター」）を拠点として、男女平等参画推進事業を実施しています。2001年には「とまこまい男女共同参画プラン21」を策定し、その後、条例の制定、基本計画の策定、都市宣言など、取組を進めています。また、男女平等参画社会の実現に向けた課題の解決と参加者相互の交流促進等を目的とし全国規模で開催されている「日本女性会議」の誘致活動を積極的にを行い、2017年10月に開催できることになりました。

苦勞

男女平等の意識を浸透させるには、一人でも多くの方々に関心を持っていただくことが必要であり、行政の施策だけではなく、市民や団体、企業の参画が重要です。本市では、計画に基づく施策の推進、条例の制定、都市宣言と取組を進めてきましたが、決して先進都市ではなく、市民意識調査結果からも、平等意識の浸透には課題も多くあり、これからも様々な角度から推進し続けることが必要だと感じています。2015年には、NPO法人ファザーリング・ジャパンが企画する「イクボス宣言」を北海道の自治体で初めて実施し、市役所としても積極的に活動を展開していく姿勢をPRしています。

満足度

男女平等参画社会の実現に向けて様々な形で啓発を行い、これまで多くの方々の参画のもとに推進してきました。2017年開催の日本女性会議では、実行委員会に約200人の市民や団体、企業の方が参加し、大会に向けて準備を進めています。市民団体である苫小牧男女平等参画推進協議会を中心とした長きにわたる男女平等参画の活動の経過を十分に踏まえながら、大会準備に御協力いただいている方々だけでなく、その他多くの方々に男女平等について関心を示してもらえよう、大会を契機にさらに機運を醸成し、推進していきたいと考えています。

これから

2017年10月13日から15日まで「日本女性会議2017とまこまい」が開催されます。これまでは県庁所在地や政令指定都市での開催が多く、人口20万人に満たない地方都市での開催は珍しいことですが、小さなまちだからできる苫小牧市ならではの会議にしたいという思いで準備を進めています。全国からご来苦いただく大勢の方々を市民の皆さまとともに温かくお迎えするため、多くのボランティアのご協力をいただきながら成功させたいです。本大会が、市全体の男女平等参画社会に向けた取組を前進させるとともに、全国の取組を推進する大会になるよう、皆さまとともに取り組んでいきたいと思ひます。

北の★女性たちへの
メッセージ

各都市においても、多くの方々が男女平等参画に関する活動を続けていると思いますが、「日本女性会議2017とまこまい」で発信するメッセージが、皆様方の活動の一助になればと思ひ企画しておりますので、一人でも多くの方の御参加をお待ちしております。

日高【新冠町】

あらい あき
荒井 亜紀さん

株式会社NOMADOC 代表取締役、一般社団法人北海道うまプロジェクト 代表理事

1968生まれ、大阪府守口市出身。馬が大好きで酪農学園大学獣医学部を卒業。浦河町内の動物病院を経て新規就農者として新冠町に移住、2004年に牧場と獣医業の「NOMADOC」を設立。人がもっと馬と親しみ身近に感じられる活動をするため2016年に「北海道うまプロジェクト」を設立。



大好きな馬と親しんで身近に感じてもらいたい

きっかけ

小さい頃から馬が大好きで、10歳の時から自宅近くの乗馬クラブに通っていました。馬といえば、やはり北海道日高管内が有名ですから、馬に囲まれた生活を夢見て高校生の時には毎年日高地方を訪れていました。人と馬がもっと身近に関われるよう、人が馬を楽しむ手助けになりたいと考え獣医師になり、新規就農で新冠町に移住し牧場と獣医を開業しました。うちの牧場は、「遊馬ランド GRASS HOPPER」という体験乗馬もやっていますが、単なる乗馬クラブではなく、馬と親しんで人との距離を縮めるような体験を提供しています。

苦勞

大変なことはありますが、苦勞とは思っていません。好きなことをやろうとした時に、そこに至るまでには当然やるべき努力であると思っています。でも、私の考えを理解し、周囲の方々から援助を得られるようになるまでは大変でした。競争社会のし烈な争いの中で、私たちの事業はボランティアで実施している部分も多く、そこを従業員にわかってもらえなかった時は辛かったですね。今回立ち上げた「北海道うまプロジェクト」は、儲けは関係なく人と人との温かさでつながっている事業で、これから本格的に活動していきます。

満足度

昔から人付き合いが苦手で、人とうまくやっていくことに自信がなかったのですが、自分の活動を理解して協力してくれる仲間がいることが本当に嬉しく、感謝しています。仕事や周囲に合わせて自分の方から変わっていくと、周囲からも理解を得られると思います。これから「北海道うまプロジェクト」の活動を新たに始めていくので、今また自分を変えていく時かな、と思っています。馬が大好きなので、本当は馬と一緒に過ごしたいのに、忙しくて時間がない！馬がご飯をおいしそうに食べている姿を見るのが一番好きなんですけどね(笑)。

これから

私たちの活動の理念を、多くの人と共有したいと思っています。私より年上の方々には、もっと色々なことを教えてほしいと思うし、年下の方々には色々教えてあげたいので、上下の世代を中継するような役目を担いたいです。若い人には、積極的に取り組んでもらって、やりながら覚えてもらいたいですね。私が明日倒れても、この活動がなくならないようにしていきたいです。「北海道うまプロジェクト」では、馬が人にとってもっと身近になり、馬と人が触れ合う機会が増えるよう活動を展開していきます。

北の★女性たちへの
メッセージ

今の生活に流されず、自分が本当に大切なものは何かを考えてみてください。夢を大切に30代～40代前半を過ごす、子育てなどが落ち着いた40代後半には、もう一つの人生を歩む準備ができています。そうすると、未来では楽しい人生を送れると思いますよ。

日高【えりも町】

かわさき
川崎ひさこ
尚子さん

北海道指導漁業士、えりも漁業協同組合えりも岬女性部長

1955年生まれ、えりも町出身。昆布漁師の実家で小さい頃から家業を手伝っていた。地元の青年会で出会った昆布漁師の夫と1976年に結婚。漁協女性部の活動で、雑魚とされていた「ヤマノカミ(オニカジカ)」の加工等に取り組み、埋もれた食材の普及に努めている。



ヤマノカミのザンギ

雑魚に光を当て、全道の漁師と若い世代の未来を明るく

きっかけ

うちは昆布漁師ですが、カレイ刺し網等の漁で11月下旬から12月下旬頃まで息子が漁船に乗っており、私は港で魚の選別等の手伝いをしていました。その時、ハタハタやカレイなど売り物になる魚だけが市場に運ばれ、その他の雑魚が廃棄されることがもったいないとずっと思っていました。2004年に日高支庁(現在の日高振興局)の企画で「埋もれた食材セミナー」を開催する時に、漁協女性部で協力することになり、私がヤマノカミの加工を任せられました。見た目がゴツゴツしていて、誰も加工しがたがらなかったんですよ(笑)。

苦勞

ヤマノカミの加工は、色々やってみましたね。まず素揚げにしてみましたのですが、味が淡泊でおいしくなかったんです(笑)。でも、素直な味だとわかり、これは良い味付けをしたら絶対においしくなると確信しました。それでザンギ(唐揚げ)を作ったら、もうバッチリ!白身の食感がさっぱりした鶏肉のようで、とてもおいしくなりました。また、年配の浜の母さん達から「とも和えもおいしいよ」と教えてもらったり、うちの昆布を使って昆布巻きの芯に入れたりして、色々な料理でヤマノカミをおいしく食べることができるようになりました。

満足度

ヤマノカミ等の雑魚を上手に加工して、商品化できたことに満足しています。2007年にはコープさっぽろ農業賞漁業奨励賞を受賞し、日高振興局のホームページには「日高の埋もれた食材レシピ集」を載せてもらっています。浦河町の「浜のかあさん直売所」には、ヤマノカミの昆布巻きや毛つぶの甘露煮など、雑魚の加工品が並んでいます。今まで捨てられていた雑魚が日の目を見られて、本当に良かったと思います。あと、「ヤマノカミなんか売り物にならない」と言っていた息子が喜んでくれたことも嬉しいですね。

これから

雑魚を買い取って加工してくれる大手の企業を探しています。私たちが加工販売もできますが、それでは私たちだけの利益になってしまいます。雑魚は全道各地の海で捕れるので、全道の漁師に利益が行くように、どこの浜でも、数が少なくても買ってくれる企業が良いのです。そして、若い世代の未来を明るいものにしたいです。2016年の連続台風の影響で、えりも町も1958年以来の不漁でしたが、めげずにがんばりたい!あとは、襟裳岬のパワースポット「風の館」で、浜の母さん食堂をやりたいです。地元ならではの味、本物の素材の味を皆さんに食べてもらって、心身共に元気にしたいです。

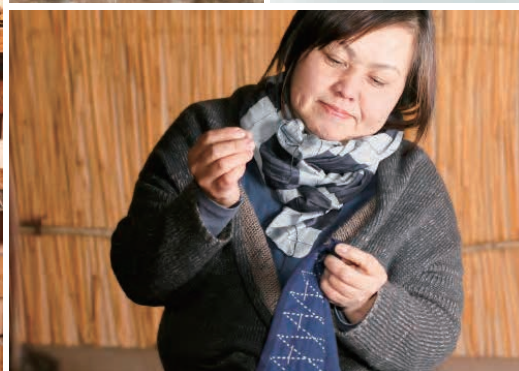
北の★女性たちへの
メッセージ

とにかく前向きに明るくやっていくこと!難しく考えすぎると、何もできなくなってしまいます。今、自分が良いと思うことを積極的にやって大丈夫です。感謝の心を忘れずに進んでいくと、周囲はついてきてくれます。北海道の良さを一緒に広めていきましょう!

日高【平取町】

せきね まき
関根 真紀さん 工芸作家

1967年生まれ、平取町出身。一度は地元を離れるも、民芸店を営む両親の元にUターンし、工芸作家の道へ。平取町アイヌ文化情報センター内の二風谷工芸館で、作家の立場でアイヌ工芸品を紹介。



作品でたくさんの人たちが喜びや幸せを感じてくれたら

きっかけ

中学卒業後、カッコいい職業にあこがれ、一度は地元を離れましたが、民芸店を営む両親の元にUターンしました。民芸店を手伝い、いろいろな人と会ううちに、もともと接客が好きだった私は、アイヌ文化のすばらしさを次世代につなげたい、そして、二風谷の民芸店がどんどん減っていく中で、アイヌの伝統工芸を守っていかなければならないと思うようになり、十代で木彫を始めました。祖父母も工芸をやっていたので、すんなりと工芸の道に入ることができました。こうなる運命だったのですね。

苦勞

親戚から言われた「時代が変われば、文様も変わるもんだな」との言葉で、すらすら描けていた文様が描けなくなったスランプの時期がありました。そんな時、友人に「あなたが新しい文様を作っていかなければ、時代が止まってしまう」という言葉をもらってから、自信を持って好きなことをしようと思うようになりました。土台があってこそ新しいことにチャレンジすることが大切ですから、アイヌ伝統工芸にこだわりを持ち、古いデザインを大切に、ベースに残して新しいデザインをするよう心掛けています。

満足度

アイヌ文化が色濃く残るこの町にいて、自分が強くなれます。兵庫県出身の夫と結婚し、子育ての中で自分をもう一度見直すきっかけとなりましたし、彼がいるから頑張れると思っています。とにかく伸び伸びとやらせてもらっていることに感謝しています。2013年3月、「二風谷イタ」(盆)と「二風谷アットゥシ」(樹皮から作った糸で織った反物)が、道内で初めて経済産業省の「伝統的工芸品」に指定されたことが追い風になり、注文が増えていることが日々の向上心につながり、新しい作品づくりにも取り組んでいます。

これから

今後もシサム(良き隣人)と共に、アイヌ文化を守り、アイヌ工芸のすばらしさを伝える活動をしていきたいです。広報や発信が私の役割だと思っています。また、子ども目線で、未来の子ども達のことを考えられる大人でいたいですね。現在、遊びながらアイヌ語を学ぶことができる、子ども向けのアイヌ語教室をやっていて、アイヌ語話者を育てていくことも目標です。さらに、アイヌ文化を育んだ豊かな自然と「びらとりトマト」や「びらとり和牛」などの食に恵まれた平取町に、ぜひ多くの人々が訪れてほしいと思っています。

北の★女性たちへの
メッセージ

これからの時代、女性一人でも生きてはいけませんが、所詮人間は弱い生き物ですから、女として強く生きていなくても良いのです。周りの支えがあって伸び伸びできます。支えてくれる、やりたいことを理解してくれるパートナー(私の場合は夫です)がいればもっと楽しく生きられると思います。